

別天津神わかづしんめい

血で赤く染まった服。

血の気を失った青白い顔。

紅玉で飾られた一振りの槍。

代償のない成果など此処には無く、代償を払ったところで結実しないイチジクの樹は神に呪われた。『思わせ振りに葉を伸ばすばかりで神を欺く下賤なものは要らぬ』と『二度と御前の実を口にする者のない様に』と主はそう申された。

「……大丈夫？……なわけないよね」

今にも枯れようとしている樹の中で、蛆の湧いた身体を苦しげに投げ出し呻くものがあつた。彼女はその少女の頭を『せめて少しでも楽になれば』と自らの大腿に乗せる。

「そうだよね……ごめんね」

「あうアエ……き」

「大丈夫、声に出さなくても私には伝わるから……」

（ ）

「だけど」

「……あなたは、私より知っているんですね。貴女は楓さんが生まれる前から楓さんを知っていた。神樹様の一部になって300年を過ごした私よりも、ずっと、ずっと昔から……」

「それでも、ごめんなさい。何もしてあげられなくて、ごめんなさい。助けられなくてごめんなさい。無力でごめんなさい……」

「それでも楓さんは」

「私はそんな風にはできなかつた……勝手だと思ってもそれで誰かが救われるのなら、それで構わなかつた」

「うん……槍の力で神樹様の中からは欠片も残さず消えてしまったけど、私の中には楓さんの根が残ってるから……私には解かる……こんな形で約束を果たされるなんて嫌だね……」

「でも、私には何もできない。貴女を蝕むものは楓さんの魂の欠片が変質したものだ。あの人が『神樹様に自分を取り込ませて滅ぼしかけたことで一つの神話へ昇華させた』神様を殺し得る呪い。たとえ槍を使っても神霊じゃない楓さんの呪い^{たましい}は取り除けない」

「私は黄泉の国には行けません……」

「そんなこと、していいのかな……産み直すなんて……」

汝、枯れ無花果に登り、樹の根元で運命を悟れ。

骸を堆肥と変えて結実を祈れ。さもなくば、有害無実と切り倒すがいい。

「楓さんは、『何してるんだ』って、怒るかもしれない。『馬鹿だな』って呆れられちゃうかも。でも、それでも見捨てられないから。それが私だから……」

少女の腐乱して溶けた肉からは、黄ばんだ白い骨が覗いている。

憑りついたものの肉を喰らいながら創を汚染し自壊を促すそれは、楓の宿命と自殺願望を象徴するような呪いだっただ。世界を覆う運命が神そのものならば、その運命を起源とする呪いが神を殺せる力を持つてもそれは道理で、神を殺せば殺すほど呪いは補強され根源から引き出される力も増してゆく。

氏紙楓の行動原基を内に残した高嶋友奈も、そのままであれば、いずれ新たな氏紙楓として呪いの再生産を始め神樹諸共滅びることになるだろう。

死の呪いがパンデミックを起こす前に誰かが止めなければならぬ。

抱えていた少女の身体を地に預け、意を決し槍を構える。

「こんな私でも、また友達になってくれるかな……？　ぐんちゃんも楓さんも、無条件で受け入れちゃいそうで困っちゃう……　な……！っ」

高嶋友奈は、あり得ないほど柔らかい手応えに目を白黒させながらも葬儀を遂行する。

「若葉ちゃんは泣きながら叱ってくれそう……！　ばかものーって！　そしたら隣にいるヒナちゃんが手を握って」

身体の設定図は既にある。一度量産までしてるし、一から御姿を創るみかたよりずっと簡単。

精神構造も原基をそのまま移植すればいい。

魂と記憶はこの人が持つてる。

「楓さんもこの人も、もう、ちゃんと死なせてあげることではか救えないのに……」

神に呪われて神を呪ったことで生まれるこの命は、皮肉にも世界に厭われながら世界を救う。世界を守る為だけに望まれない命を作る私はきつと誰よりも罪深い。

「それでも、楓さんを世界を滅ぼす呪いになんてさせられない」

痛みは貴女が。罪は私が引き受けるから。

今度こそ幸せに……

*

——垂れ幕の向こうが明るい。

今はもう春ではあるが、春という単語の優しげな印象とは裏腹に冬の気配は未だ強く、春眼瞼を覚えず我々の怠惰な脳みそは深い眠りに誘われる。できることなら死ぬまで眠っていたい。そもそも最近の研究では、眠っている状態こそ生物の本来の姿であり、覚醒とは外界への対処や摂食のために仕方なく獲得した機能なのだという。

寝たいときに寝たいだけ寝たい場所で、何者の妨害も受けず眠ることができる。そういうものに幸福とか安らぎを得るべきではないか？

しかして私は明晰夢しか見ることができない。

それも半眠半覚の、夢を見ている間も寝ている外側を把握している浅い眠りだ。

『毎晩淫夢に変えて自由自在とか最高かよ……』とはならない。残念ながら。

夢の中であろうと、夢の中に設定されたルールやストーリーに従って行動しなければ冷めてしまうのだ。故に、ただ浅いだけの疲労の抜けないこれを睡眠と言っているものか言葉に迷うくらいで、仕事のために寝起きしていると寝ている間も何となく今何時か分かってしまい、目覚ましが鳴る前に身構えて落ち着かない。

今日も不眠ではないにしても安眠と呼ぶにはとてもじゃないが気は休まらなかつた。

空腹を満たせと身体の訴えるまま億劫な身を起こし、寒々と台所へ向かう。

キッチン台の上には、昨日買ってきたまま置きっぱなしの豆腐があるので、その水を切って、その場で「ω」ほど切り崩して麵つゆで食べる。すると豆腐パックに空きスペース

ができるので、ここに生卵を落として解き、更に豆腐をサイコロ状に崩して食う。4割空きができたのでここに米を投入して豆腐「π」をカツ食らう。

財を一山築くとか世界征服とかハーレムで酒池肉林とか満漢全席とか、何故そんなものを欲しがるのか分からない。金は幾らあっても便利なものだけけど、貯め込むことに喜びは感じられないし世界統一とかハーレムとか管理のことを考えると面倒過ぎて要らない。

せめて社会の外側から疫病投入とか天変地異起こして観察したり、めぼしい子攫って軟禁するとか、そういうのがいい。生き物は勝手に繁栄してほしい。

「4」程度豆腐が残ったので、今度は豆腐「π」に梅茶漬けの元を適量振りかける。

お茶漬けの元は振りかけとして使っても十分な味がある。

最近の水を用意するのも面倒で、ずっとこうしている。

てきとうにかき混ぜて口に放ると、熱々のご飯と、ひんやりした豆腐のコントラストが口の中で混ざり合い、梅塩の酸味と塩気がこの貧困で雑多な食事を至高のエサに変える。十分だ。

別に私の味覚が鈍いわけではない。むしろ並より少し感度が高いまである。

金が無くて手に入らない葡萄を指さして『酸っぱいに違いない』と僻んでいるわけでもない。ただ底が知れて、高が知れてしまっただけだ。

感情のふり幅には限界がある。

どんな美食も、美味いという以上の快感は生まれない。

カレーうどんは好きだが作り置くほどでもない。

内面の美を兼ね備えた絶世の美女を侍らせたところで他人は他人。面倒なだけだろう。

人類とは分かり合えない。

薬物を使って性的快感を最大限高めたとして、それを幸福と言えるか？

食って、集めて、まぐわい、威圧し、人を操って一時的な享楽に没頭し、延々『喉元過ぎれば』を繰り返す。そんな不毛な活動としか私の衰弱した精神では感じられない。過剰に刺激を得ても疲れるばかりだ。

生きるものは死に、形あるものは必ず壊れる。

覚えた感動は忘れられ、流行りは廃れる。

盛者必衰。諸行は無常。万物流転す。

同様に挫折か満足かの違いこそあれど、希望もまた必ず喪失で幕を下ろす。

希望を抱いたまま死にたくば、己を限りある個人と捉えないことだ。そうすれば、少

なくとも『自分ではない誰かが、いつか自分を全うしてくれるだろう』と思いつながら死ぬことができる。その行動の真実が単なる妄想に過ぎなかったとしても、それを疑うことがなければ、その者にとっては真理に違いない。

メシ食って血糖値上げたら眠くなった。

時計を見ると、まだ6時12分。

空になった豆腐パックをその場に放置して、押し入れの万年床へとぼとぼ帰郷する。

フスマ代わりの暖簾もとい、巻き取り式ブラインドを降ろせば寝室の完成だ。

敷布団などは無く、毛布ともう一枚薄いものが二枚折に敷かれてあるだけの、簡素というよりはもはや粗雑と呼ぶべき私の寝床。枕元には給水用の2ℓスポドリと、携帯PCと、少

ビニール包装の箱ティッシュ。すぐ外の床にはゴミ袋が立っている。

「ねむい……」

丁寧な暮らしとはとても言えない粗末な暮らしぶりだが、そんなもの大した話じゃない。どうせ一時的に居るだけの仮住まいなのだから、荷物も段ボールに詰めっぱなしだ。

私は目を閉じ、出勤時間まで煩悶な世界に目を瞑る。

この世では生きることが川を流れ行くようなものと表現されることが多くあった。

ああ、川の流れのように。

時間も因果も過去から未来へと一方通行に流れ落ちてゆく。

私は人生とは旅のようなものだと考えるが、流れ流され、では人生を川だとして、そこで得た経験や知識、記憶、関係や宝物は何に喩えられるだろうか？　くさ眠い。

私はこれを『水』と考える。

川の水を掬ってみてもそれは川を手に入れたことにはならず、掬った水を飲んでみても勝手に流れ出てしまい、水の一掬いでさえ所有には程遠く、容器に保存しているだけでは身も心も潤せない。

身体の隙間を通り過ぎてゆくばかりで、なにものもこの世で得られはしない。

しかし無くてはならないものだから誰もが渴望して止まぬもの。

それが水。

これほど“価値”を言い表すのに都合のよいものはない。

なれば、われら浮世に揺蕩たゆたう衆生しゅじやうは、根を張り損ねた浮草のごとし。

そういえば、人類のポピュラーな願望に不老不死というものがある。

消費活動を刹那的で幸福と感じられないというなら、永続する実在はどうか？

どっちにしろ、活動の中に喜びがないならあまり意味は無さそうだわ。

そもそも私は既に神（私の定義上）なので。

「……」

私は昔、自己の消失を恐ろしく感じていた。所謂タナトフォビアだった。

発生の瞬間から宿命付けられる死と変容のみが普遍に不変であり、宇宙がこの宇宙であ

る限り不変の常在は存在し得ない。しかし“だった”ということとは克服したということ

で、さらば、死を超越するには如何すればいい？

簡単な理屈だ。

西暦の頃の歌にも『私は火葬された後、千の風に成ってあなたを見守っている』という

ような詩があつたように、変容し続けることが約束されているのなら、変わり果てた先も自己だと受け入れてしまえばいい。

冬に積もつた雪が春には溶けて里山を潤し、川に変わり、海へ変わり、雲となり再び大地を濡らす様に、昔の人々が死体から湧いて飛び立つニクバエたちを、魂を運ぶ神聖な御使いと捉えたように、姿を変えた魂だと捉えたように、その真実が、焼かれて酸素と結合し、肉の枷から解放された炭素を含んだガス”であつても『その人の状態が移行しただけで何も失われてはいないのだ』とあるがままを受け入れてしまえばいい。

もしくは自他の境界を破棄し、宇宙などといった、より長命な存在と同化すればよい。私は私であると同時に主観せかいであり、宇宙ぜんたいであり、神うんめいであり、根源しんりなのだ。自他を再定義すればいい。

まあ、焦点が違うだけで、どちらも意味は同じなのだけけれど。

解答は。全ては。初めから私たちと共に在る。

すべては初めからここに遍在しているのだから、力は引き出すものであつて得るものではなく、世界と私に境界を引かないならば私がここに居る必要はなく、目障りなすべてに目を瞑つて死ぬまで眠つていたい。 結論。私は眠い。

目を開けると、高い天井とそれを支える太い木の梁が見える。

***さんが死んで、もう何年だったろうか。

もう春だと云っても、山の中は冬と変わらず冷えるわ冷える。

「うあ……つく、びが止まらぬ……… 朝か……」

日の出前の暗い囲炉裏には、洗ってない吊り鍋と一人分の食器が転がっている。

「……寒つぶい………」

あれと逢ったのは霧の立ち込める森の中。往く先を見失い、日も暮れて、いよいよ木の上で野宿も考えねばならんと腹を決めたところで後ろから声をかけられた。

あんな場所あんな時間に女が一人うろついている筈がないから、狐狗狸か鬼の類と違って大層驚いたのを覚えている。 実際、人ではなかったが。 そう、あのときも月明りで手

元を見るのもやっつとという闇中から現れたものだから、今もこうして囲炉裏を挟んで闇と向き合っていると、向こう側から話しかけてきたりしないものかとジツと待ってみたりする。

「……まあ待ってみたところでだ。 妖怪も死んでしまえばそれまでだわなあ」

空の櫃の下からムカデが半身を晒して何かを食っている。

昨晚メシをよそうときに零した米に御器嚙あたりが齧りに来ていたのだろう。

「寄りよったのが鼠だったら、食われていたのは御前だったかもしれないぞ？ 運の良いやつめ」

こんなところはずっと一人でいると、独り言を垂れ流しても気に留めることが無くなる。あの人もそうだったのだろうか。

「今日は———— 日が出てから考えるか……」

寒さと眠気で思考が判然としない。

「死んだだけだというに、実際こうなると気になってしまうものだな」

火鉢の中で燻くすぶらせていた炭を取り出し、干し草と囲炉裏くわに立てた枯れ木を食わせる。

すると程なく、小さくて赤いやつがパチパチと笑い声を上げ始める。

私はこのカンカンに焼ける炭を見るのが好きだ。

寶石よりも明るく透くように輝く姿に惹かれて、うっかり手でも触れようものなら、ジ

ユツと音を立てて焼かれるあたりも可愛らしい。『身を焦がすほど——』とは昔の人も上手いこと言ったものだ。

目を閉ざすも瞼の裏にこうこうと熱と光を届けてくれる。

熱が肌を通過して血液を温め私に溶け込んでいく。

良くも悪くも、あの人も同じく、死に別れた今も私の中で残り火を点し続けている。

「***さんは、本当に私なんぞが最期で良かったのかね……」

この場所は異相に在り、基本的に向こうから此方への一方通行。

当然、坊さんたちが都合よく迷い込むことなく、葬儀なんて粋いきなものは何もできていない。

そのまま土葬にしても、獣や、ケもの達が掘り返してしまおうので骨にしてから埋めた。

腐らせるのも忍びなく、火葬するには森の中は湿り気を帯びていて火力が足りない。

手足をバラバラにして、肉を削いで、骸むくろを奪むすわれないように骨にして焼いた。

「……まあ……」

自分を納得させる言葉を探して口を開いたまま、かぶりを振って言葉を棄てる。

「とりあえず、何か食うか。寒いと碌なことを考えないからな。体温を上げなくては」

今年も山藤から沢山取れた黒い毛虫とフジ豆を籠から取り出して、湯を張った鍋に放り込む。すると、クネクネと愛らしく転がっていた毛虫たちがスツと力を失くし、あの人の小さな一口大の弾力のあるあの大きさに縮んでゆく。みんなみんな儂いものだ。こんな

ように特別な感慨も無く、日常の当たり前の中で命は消費されてゆく。私も同じように何に顧みられることもなくただ消えてゆくのだろう。

ぼんやりキラキラと、日常に転がるあの人との日々の欠片を拾っては耽ってしまうのも、それが何だか寂しいことのような気がするからだろうか。

「そういえば、バッタを脂で揚げるとプクプク風船みたいに膨らむ……………」

あの人も私もカマドウマ派だったから『またそれか?』と、よく駄々をこねられた。

『ケチってねえで肉食おうぜ、にく!』

『冬の備蓄に取っとなきヤダメだつて言つとるでしようが』

『いいじゃないか、酒のアテにちよつとだけ』

『分かつてるくせにというか、そう教えたのはあんたでしように』

ああ……そうだ。そんなこともあった。気付いてしまうと途端にこれだ。

思い出してしまふ。

『全く融通の利かないね、キミは。ただ生きているだけのこと、どれほどの価値がある。生きている今を素敵なものにしなければ、今生きていることを素晴らしいと感じられなくなるぞ?』

ほら、君の愛おしい人である私が『キミとの楽しい晩酌が恋しくてたまらない』と赤裸々に秘め事のお誘いをしているのだよ？ キミの答えは本当にそれで良いのかい？」

「……そっすね」

「生返事じゃないか」

本当にバカバカしい……

「煮干したコオロギでよければ」

「もう一声……！」

「じゃあ、冬眠しに集まってきた多量のカメムシ」

「あまりにも色気が無い……」

あのとときは私も若く、どう反応すべきか分からなかった。

私にとっての正解は他にもあったかもしれないが、今思えばあれこそが***さんが求めていたものなのかもしれない。

本当に。本当に。バカバカしくて、愛おしくて、困った人だった。

「……まあ、今更しようのないことだな」

「後悔しているのか？」

「していない」

「恨んでいるのか？」

「恨んでない」

「嘘を吐くな」

「黙れ」

「怒っているのか？」

いつの間にか侵入していたケのものが、私の生皮を剥がそうと神経をついで啄む。

「怒っていない」

カブリモノ。被り鬼。単にカブリなどと呼ばれるこいつらは実体を持たない為、戯れに生き物を殺しては剥いだ皮を被って成り代わる。その手口は脅かして崖から飛び降りさせる単純なものから、群れに陰を落として殺し合わせるものまで様々である。

もっとも、この世界に人は私一人なので、化けの皮を奪ったところで意味の無いことだが。

「私を殺したこと、私の肉を喰ったことを悔やんでいるのではないか？ だから私の言葉を無視できないんじゃないのか？ なあ、やり直さないか？ ……私はもう一度キミと共に

「**死人が口を利くな**」

伊弉諾尊が黄泉の入り口を塞いで以来、死者が甦ることは無くなった。

だから、たとえどんなに似ていても気を許してはならない。それがその人しか知らないはずのことを口にしても、たとえ本当の本当にその人本人だったとしても、それを確かめる術は無いのだから。

忘れる筈もない。あの人の喉笛を切り裂き、心の臓を貫いて殺したのは、他でもない私なのだから。

「そうか……そうだな……無神経なことを言っただけだった……」

一言そう言って暗がりから返事が返ってくることはなかった。

もうカリカリと床を引っかくムカデの足音も聞こえない。

拳を作った額に杖を突き、もつとマシな選択があつたのではないかと言葉にできない、すべきではない葛藤が吐息となつて歯の隙間から漏れ出る。

「……ああそうだ。私が殺したんだ」

腹に据えかねる居心地の悪さが、今も私の胸中に渦巻いている。

それでも原則は守らなければならない。

「あ……まあいいか。毛を筆るのを忘れていた……」

口の中がモソモソするから処理した方が美味いが、生きて動いてるのを筆るのも少し気が進まないの、ついこうしてしまうのだよな。……生きたまま焼けた脂を泳がせたりするくせに何言ってるんだって感じたが。

「……いつまでも私がこんな有様では、あの人が死に切れんじやないか……」

あの素晴らしい日々を後悔などして堪るものか……

*

午前0時のチャイムが鳴る。

日々労働に明け暮れ、飯を食ってシャワー浴びてクソして寝る、無為で無気力で、くだらない、億劫なだけの一日がやっと終わる。

働けども働けども貯金は貯まらず、会社は労基無視して平気な顔で虐めを放置し、働いているうちは病院に掛かる暇が無く、無職になれば治療にかける金が無く、使う機会のないままななしの給料を吸い上げる保険屋に、還ってくる保証の無い破綻した年金制度。

一〇年前に暴行を受けたことを証明しろと不可能なことを言い募る警察。こんな状態では
できようはずもない結婚。普通に恋することさえ私には遥か遠く……

私はいつまで生きていなければならぬのでしょうか？

自殺は迷惑だから止める？ ハッ、お前らに配慮して私に何の得があるのさ。

腹に爆弾仕込んで、モールのど真ん中で汚ねえ花火になってみるとか刺激的で素敵じゃ
ない？ ねえ？ まあそんな知識も金も無いけど、せめて死ぬときくらいは、これまでの
ぶん目一杯迷惑かけてやるよ。

大体、一人自殺に踏み切らせるまで搾取して追い詰めといて何？ ここにきて更にお
かわり要求すんの？ 努力が足りない？ は？？？？ 努力ごときで何とかなるなら苦労しね
えわ、死ぬよもうお前ら。

誰も私を助けなかったし、私たちは生きてるだけで丸損だ。

せめて眠ったまま目覚めなければいいと思う。明日など来なければいいと願う。

まともな家に生まれて、虐められず普通に友達作って遊んだり、お金に困って犯罪すれ
すれの行為に及ぶ必要もなく、結婚式で両親に感謝の言葉を送ったり、結婚後の愚痴をこ
ぼして喧嘩になったり、子供の成長に一喜一憂して反抗期に手を焼いたり、それで老後は

出会ったすべてに感謝しながら息を引き取るみたいな、真つ当な人生の何一つも私には許されなかった。

そんな私が、せめて自分の死に方を自分で決めることがそんなに罪深いことですか？
罪だったとして、罰なら散々受けたじゃないですか。

もう許してくださいよ。

「小松まだやってんのか！ちんたらやってんじゃねえぞ！」

小松。高知で3番目に多いという自己紹介のネタにもならない半端な私の苗字。

小学校では下の名前が香菜だったからと、特に意味もなく小松菜と命名されて虐められた。

小松菜から野菜を連想したのか、給食では山盛り嫌いな野菜を盛られて、そんなこと知る由もない担任には『残すな、全部食べろ』と昼休みが終わるまでトイレも許されず教室の机に監禁された。泣いても吐いても許してはもらえなかった。

子供は大人に逆らえない。

逆らえば、ご飯を取り上げられて死んでしまうから。

アイツは良いことをしたつもりなんだろうな。

お陰で、私は今も人前でものを食べることができない。

「おい！人が話してるときは！——」

チツ、うるせえな。お前が急かすから作業しながら聞いてやってんじやねえか。

大体、その話今する必要ある？ 時給発生させるほどの価値あんの？

効率化の指導をするわけでもなく、怒声上げるだけなら邪魔だから黙ってるよ。

ここももう辞め時かな。

「今日は4時間残業か……」

タイムカードを記録して工場の外に出る。

年も跨いですっかり本格的な冬だ。

雪に磨かれて透き通った空気は月光を妨げることなく足元を明るく照らし、道路脇の地層の標本みたいに積み上がった雪壁せつべきは月明りを吸って青く輝いている。とても清浄で静かな夜。 本当ならこの銀景色だけで心身は癒され、パリッと肌は張りを取り戻し、明日に向けて安らかな眠りにつけたでしょう。

私の中の憎悪で焼け爛れた心にはマイナス20℃の極寒の世界でも冷やしきるには足りなくて、苦しいのも痛いのも忘れられない。

(原則残業はすべきでないことだって、そんな当たり前のことも理解できない会社は潰れてしまえ。倫理だの社訓だの美辞麗句のたまうだけで実態の伴わない口だけ野郎は死ぬ) 一つ一つは小さなことも降り積もるままにしていれば、あらずっしり固まった粉雪がボロ屋を踏み潰してしまう様に芯の腐りかけの私の心を軋ませる。

こんな私でも大多数の人間よりはマシという地獄……嫌だな。

「……なんか甘いものでも買って帰ろ」

はらはらと雪が降り始め、人も車もすつかりいなくなった公道を横断歩道も赤信号も無視して帰路を縮める。

良くないことかもしれないけど、最悪私が死ぬだけだから気にしない。私をはねてしまった運転手には不運だけど、撥ねるのが私でなくとも、どうせそんな運転手はエゾシカ撥ねて廃車にするんだろうからしらない。

こんな見晴らしのいい道路で追突事故起こすなんて制限速度無視上等の輩だし、死ぬの

が子供とかじゃないだけマシだと諦めてもらいましょ。

途中にあるMAXバリュに寄って、どろどろに熟れた柿とマロンケーキ、何時から放置されていたか分からない6割引きのバック寿司、明日の夜食食べる総菜パンなどを買い物かごに入れていく。

店内は暖房が効いていて防寒具を着けたままだとむしろ暑いくらい。

お気楽な店内ソングはその軽い調子とは裏腹に、その真意はリズムに引っ張られて気が緩んだ財布に手を忍ばせることだったりする。それでもこんな時間でも営業している24時間スーパーは、私たちのような荒れた生活を送る労働者の味方だったりするのだ。善とは言い切れずとも悪とも言い切れない割り切れないものがここには沢山ある。廉価品ばかりだけれど空腹は満たされる。

「これくらいにしておこうかな」

靴裏のスパイクバンドをカチカチ鳴らしながら店を後にする。

ポケットの中のカイロは随分前に温くなってしまった。部屋に置きがあるのに買って帰るのも勿体ないけど、やっぱり夜明け前は冷える。こんな日は湯船に浸かりたいところだけれど、そのために今から掃除するのはそれ以上に億劫で、今日もウイスキーを煽りな

がらダラダラとつまみを摘まんて朝を跨ぐのでしょう。

不意に背後から視線を感じる。

(痴漢か変質者かスパーに寄る前からついて来てるよな……どうしよう……)

このまま部屋バレするのは避けたいし、かと言って助けを求めるアテもない。店も殆ど締まっているし、最寄りのコンビニも数十メートル通り過ぎて引き返すこともできない。

こんな時間では人込みも無い。

(交番は……イチかバチかそれしかないか)

あくまで意識は不審者に向けたままバッグから携帯電話を取り出す。

「ねえ、どうしたの？大丈夫？」

「えっ……はい、」

「どうしたの？おうちどこ？」

「いえあの、大丈夫なんで……」

「いいから、おうちどこ？」

「いえ、ホントに「ねえ、ちゃんと答えようよ。人が折角さあ」

なんだこいつ会話できないやばい。警察

「おい！人が話してんだろうがこっち見る！」

「っっ！」「馬鹿にしてんのか?! あ?! このクソ女!!!」

携帯に伸びた手を危うく交わして私は走り出した。

「おい!!」

ヒュツと上着のすそを爪が掠めて背筋が凍る。

(掴まれたら終わり！早く！早く！電話っ！)

緊張で指の筋肉がこわばり何度も番号を押し間違えて、氷に覆われた歩道に足を取られ地面や半端な高さのブロック塀に身体を打ち付ける。携帯電話の液晶は割れて入力した番号が判らなくなってしまった。送信。繋がらない。送信。繋がらない！ポタンが硬い。中身がずれてる！繋がらない！繋がらない!!

「待てア!!!」

視界がチカチカする。走り慣れていなくて脇腹が痛い。走り過ぎて太ももが痛い。塀のふちで切られた脚が痛い。転んで突いた手が痛い。一心不乱に走り続ける。不幸中の幸い、向こうの靴はただのスニーカーで数メートル毎に体勢を崩しており何とか距離を詰められずにいた。

「ッ痛てえ、クソ!!」

通報を諦めてバッグに押し込んだ手を引き抜くと、耳を割るようなけたたましい音が夜を裂き、安眠を妨害された部屋からぼつぼつと蛍光灯の明かりが灯る。

「っこのー!」

起き上がろうとした体制のまま固まっていた不審者の顔目掛けて防犯ベルを投げ付けて、双立するアパートの陰に飛び込んだ。

遠くであいつが喚いている声が聞こえる。

「ハッハッ……追つて、きてない、つか……」

逃げ切れただろうか。心臓がバクバクと拍動を続けている。

「こけたときはっ、死ぬかと思った……!」

街灯の下で見ると、あちこち汚れていて出血もしている。

「こわ……ああ……っ!」

早く帰ろう。そして警察に見回りをお願いしよう。

そうだ。

「……ああ、携帯」

携帯壊れたんだった……くそ……

「もういいわ……もう着くし、飯食って寝よ……」

走ってグチャグチャだろうけど酒あるし味は変わらないからよし……

「割れてる……ウイスキー 破片、穴……」

……

階段を駆け上がって、着の身着のまま顔も洗わず布団に潜る。

逃げてる間は恐怖と緊張でそれどころじゃなくて気付かなかつたんだろう。

しかたない。荷物が軽くなったことで逃げ切れたのかもしれない。だからしかたない。

だとしても、こんな気休めにしかかならない慰めすら許されないのかと……

だれか私の息を止めて……

*

秋の暮れ、僅かな茜色の時間。

私たちの時間。

私の私室に二人きり、何も起こらないはずもなく……なんてね。

もうそんな冗談がむしろ切なくなっちゃうね。楓さん。

「楓さん楓さん」

「何かね、園子君」

とうとう私達だけになっちゃったね。

「どうした？」

「楓さんは幸せだった？」

「んん？ ……まあそうね。君たちのお陰で退屈する間もなかったさ」

「私もやたら長生きしちゃったけど、今思えばこれで良かったんだと思います。だってずっと楽しかったし……フーミン先輩の糖尿病が悪化して倒れたときも最期は笑って送り出せました」

『うどんに生き、うどんに死す……我が生涯に一片の悔いもな……』

うわーん!!!うそうそーやっぱり樹のかじやくをもっと見てたかったわよおお
お!!!じにたくにやいよう!死にたくないいいいい!!!棗と待ってるからみんな
あ早く来てねええええええ!!!『生きてるうちから悪霊化すんな!』……………

にぼっしーには恨み言も言われたけど、それ以上に心配されちゃった。すごく悲しいの
に何だかおかしくなっちゃって、悲しくなり切れない。

『東郷……後のことは任せたわ……主に園子の事とか…園子の事とか…死ぬほど疲れた』
『夏凜ちゃん…………… なんだかんだで風先輩の後を追うと思ってた……』

『ちっがあああう!!!なんで私がつ! ……おいそこ涙ながら言うな微笑ましい感じに
見送るなあああつ!!!! あ…むり……………うきゅ……………』

悲しみを背負ったイツつんは益々大成して、葬儀は参列者が多すぎて国民ホールで行う
ことになっちゃった。最期の言葉もかっこよすぎて……

『……友奈さん。東郷先輩。園子さん。皆さんにお願いがあります……』

『なあ、つ、いづぎちゃつ、うづづー!』

『友奈さん……私の葬儀では、どうか泣かないでほしいんです。

私は歌手として、一人の表現者としてこれ以上ないほど幸福でした。

お姉ちゃんが逝った後も仲間を支えられて……お姉ちゃんみたいな人になれたかは分かりませんが、まだ歌い足りない気持ちもありますけど、身内が号泣していたらファンの皆さんが泣くタイミングを失ってしまうと思うんです。なので今。全部。出しちゃってください。ね♪』……………

末期癌で苦しい筈なのに私たちの前ではずっと笑顔で、ほんともう、イツつんカツコ良すぎて……誇らしすぎて……葬儀ではゆーゆも涙泣きで耐えて、それがまた涙腺にグツツときて、わっしーに倣ってみんな最敬礼で送ったんよ……

ゆーゆが亡くなったときは、虫の知らせというか不思議なことばかりだった。

いつもなら詰まるところが、その日の印刷機は白紙を吐き出し続けて、電波も乱れに乱れてスマホが爆発した人も居たとかいないとか。なにより、わっしーがあまり取り乱してなかったことが恐ろしくてなんか色々吹っ飛んじやった……わっしーを差し置いて私が悲嘆にくれるにもいかないし……

『ごめんね、そのっち。先に逝って待ってるね……』

わっしーは

「んまあ、色々あつたろうさ。今何歳だっけ」

「楓さん？ 女性に歳のことを聞くのは不敬ですよ？」

「そんなつもりはなかったんが、そんな気にするかねえ」

そりゃ義体の楓さんには関係ないだろーけど、こちらら生身なんよ。いくら楓さんがしわくちゃのおばあちゃんになった私にもいやむしろ楓さんが今の今もあの頃みたいにチヤホヤしてくれるから若作りに手を抜けなくてじゃなくて、もう！

「……ひゃへ、ほおをふへふ」

あなたを看取るのが私で本当に良かったと思う。

「……気付いてた。あなたが声を出して笑うときは作り笑いだって」

あなたを止めるのが私の役目でよかった。

「そうかい。それで？ 私だって愛想笑いくらいでできるわさ」

楓さんが揺れるたび、鎖がカチカチと音を立てる。

「……もう楓さんのフリをしなくてもいいんですよ？」

逃げられないように、私と楓さんの首同士を鎖で繋いだ。あくまでも楓さんとして存在している以上、ベットで寝たきりの私を死なせてしまうようなことはできない。

「はっは。今更なんだい、そんな話をするために呼んだん？　こんなものまで使って？」
「そうだよ……」

「私は……感謝してるんよ？　だから、もう、」

「さて、なんのことだろうかね。この私が偽物だとしても？　あの日にも言ったろ？」

「私が私として在る限りそれは私なんだって」

「ううん……やっぱりそれは違ったの。だってあなたには、楓さんじゃないあなたの意思が……心があった」

「もう止めようぜ？　そんな確かめようのないことで疑心暗鬼にならなくていいのよ」
楓さんが頭を撫でてくれるだけで涙が零れてしまう。

分かったときにはもう取り返しがつかなくて、せめて楽しんでもらえるように努めた。
楓さんがしてくれたみたいに、したいことをさせて求めるものをあげたかった。

お金でも、権力でも、私の命でも、あげられるものなら全て差し出す心積もりだったの
に……あなたは何も求めてくれなかった……私たちに何も望まなかった……

「……なあ、園子さん。どうでもいいことじゃろうて……泣くことなんてないんだよ」
「そうやって、どうして、見透かしたようなことばかり言つて！ホントのことを言つてくれないの……っ。苦しいなら、嫌なことは言つてよ……！ 本当の楓さんじゃなくつても、この数十年を共に過ごしたのはあなたと私たちなんだよ！？ そのことまで嘘にしなくていいじゃない!!」

この人も楓さんと同じ。運命を決め付けられて生まれた。

この呪縛から解放してあげないと……死ねない！

「ああ……なんか私の存在が、却つて園子さんを苦しめていたみたいだね…… 私はあるとき姿を現すべきではなかった」

違う！ どうして！ そうじゃないんよ！

「ごめんね」

「違うの……謝らないで……そうじゃないの……ただ、私は……」

だた……何？ 恨まれていても構わない。それくらいのことにはして……

ただ、このまま私達だけ満足して置いては行けない。確かめないといけない。

力を貸して、ミノさん……

「どうしてほしい？」

そして言わないと……

ありがとうって。ごめんなさいって。

でないと私たちが居なくなつた後もずっとこの人は……

「わたしが、あなたに、してあげたいの。私に何かしてあげられることは、ない……」

……？」

どうすれば、あなたを救えるの？

「ただ、平穏安らかに過ごしていってくれば十分ですよ。園子さん」

どうして拒絶してしまうの？

「あの日してくれた話。覚えてる？」

「どの日かな」

「楓さんが私たちのもとに帰ってきた、あの日してくれた、お話……覚えてる？ あの時

とき楓さんは根の国を通つたって言ったんだよ？……変だよ。楓さんが死後向かう先は

黄泉の国のはずなのに……どうして根の国に居るの？」

楓さんとして在る以外の嘘が吐けないからでしょ……？

「矢継ぎ早に捲し立てて遣り過ごせたと思ったのに。

……………気付いてないフリしてればいいものをさあ……………なんで言っちゃうかな。 罪悪

感？ くっだらね。 私だって悪戯に傷つけたくなんかないってのにさあ、本当に何一つ

上手く行かないな。私」

「ごめんなさい…………… ずっと言えなくて……………」

「目の前の地獄に気付きさえしなけりゃ幸せなまま死ねたのに、本当に馬鹿だよ御前は」

「あのっ、あのね」

「これでお役御免、私の数十年は無駄になりました残念無念ってか」

「お願い……………聞いて……………」

寝たきり老人のくせに乃木園子が体を起こして縫りついてきた。

寝たきりなんだから寝てろよ大人しく。

ジブンの利益のために、自分可愛さのために、気付いていながら精神奴隷でいるよう強
いていたことを今になって謝るくらいならいっそ墓まで持ってけよ。口にしたところで誰
も幸せになれない真実なんか告げんな馬鹿かよ。 見透かしたようにじゃない思考が筒抜
けなんだよ、この私は。

私を救うとか、およそ不可能なことを口走る前に死ねばいいのに……

「神樹様の化石の中から剣が発掘されて……それを使って、あなたを「無理」
槍なら兎も角、剣じゃ無理だろうな。

怖気を纏って障害を薙ぎ払う遠呂智の太刀。

力^{りき}十分でも暴力では正せない。英雄や勇者に私達は救われない。

「ごめんなさい……」

私に対するルール改竄も槍がなければ行えない。

あの後、アレを高嶋友奈がどうしたか知らないが、さすがにもう天神に回収されてるだ
ろ。

「キミが謝ることじゃない」

呪いを御するために与えられた自我を失えば世界が減ぶから私は殺せない。

神も人類も丸ごと滅ぼし得る爆弾がここに在る以上、もう神々との戦争は起こらない。

仮に天神が槍を突き立てようとも、四肢飛散させれば呪いの侵食のほうが速い。

「ごめんなさい……」

世界とは神で神とは即ち世界なのだから、私の身体を壊して世界と私との境界が崩れた

時点でアウト。一度溶けた呪いの回収は不可。世界は私の運命のろいに汚染される。

もとは、どんなに努力しても全ての望みが挫かれる呪い。

神樹に憑りついた残滓さえもその望みを挫くために槍を呼び寄せた。高嶋友奈は楓を救おうとして永久に救えない存在を生み出し、穢れを受けて神性を失った。魂の欠片を口にしただけのやつも、それが体内で呪物化した途端滅びた。楓の例は挙げるまでもない。

謂わば自爆テロ的な呪詛返し。

腹の中の取り除けない爆弾に戦々恐々としている。

「私は謝罪の言葉にも感謝の言葉にも価値を感じない。善意も厚意も受容できない。

私たちは初めから幸せになる機能がなかった。乃木のせいじゃない」

そんな生き物を救えるはずがない。不幸は前提。

「不幸は前提だから。だから私たちは幸福を手に行けるお前たちを羨んで嫉妬して、幸福を奪われそうになったお前たちを救いたいと思った。幸せになれるはずの奴が不幸になるのを見ていられなかった」

愛とか情とか、そんなんじゃない。

どちらかというとき自己憐憫により近い。

「だから私が楓でなくても、お前たちの思想を嫌っても、強いられる境遇を呪っていてもそんなのは関係無く、私達はキミたちの幸福な死を願ってる。分かり合う必要も仲直しも必要ない。馴れ合うつもりも毛頭ない。私が死ねなくとも御前は死ね」

実存在は存在するだけで他を押しつけて空間を占有しているのだから、意見の衝突は許容しなければならぬ。衝突を認めないのなら存在を認めないも同じ。

「泣くな、乃木園子」

「ごめ、なさい……！ 泣いて、黙ってるのは卑怯、だよ……っ」

「知るかよ。涙ごときで私達が言葉を変えるわけがないだろ」

「えっと……えっと……」

「……いつものように、ゆっくりお話し」

「ごめんなさ、い……っ…… あなたが本当は苦しんでるかも、しれないこと…… 気付いてたのに、わたし黙ってた…… 『まだ分からないから』 って…… 『確定じゃないから』 って言い訳して、これまでの全部を失くしてしまうのが怖くて黙ってた…… あなたの本

心を知ってしまるのが怖くて逃げてた……」

いい歳して小娘みたいに震えて、馬鹿だよ御前は。ばか正直者だ。

「あなたに幸せになつてほしかった、のに……っ」

「無駄だったな」

「ごめんっ……なさい……」

「だから謝んなつて……御前は幸せだったか？」

「うん……」

「なら笑え。私は、幸せそうな御前たちが憎らしくて大好きだったよ」

「っ……づん。……うんっ」

結局私にできたのは神々への嫌がらせのみで、この子を幸せにはしてあげられなかった。世に苦しみをまき散らすだけの存在のくせに、死ぬことも許されない害悪。

「さあ、顔をお上げ。これでお別れだよ」

「やだ……嫌だよ楓さん……もう会えないのは嫌だよ……」

「向こうには三ノ輪も、東郷も、乃木若葉も居る。皆が待つてる」

「でも、あなたが居ない……」

「この私が居なくとも楓が居る。聞き分けなさい、乃木園子。

……いや、今のは忘れてくれ」

会えても仕方がない。

「……楓さんはどうして彼方から帰ってこれなかったんですか？」

「忘れる……」

「話してください」

「………知ってどうする。会っても如何にもならんぞ」

「それは私が判断します。隠さなければならぬような目に遭っているということですか？ 教えてください」

「………不味ったな、言わずとも見付け出してしまおうか……」

「………あいつは一番下で凍ってる……会うだけならできるだろうが、それだけだ。触れることも話すこともできない」

「………凍てつく地獄の最下層……助けようなどと思うな。あれはあの場所で封じていな

ければならない要石だ。解凍は勿論、あいつ自身が災厄の根源故に身代わりも利かない」

「………ありがとうね。心配してくれて。愛してくれて。」

でも。だからこそ私は行きます。楓さんを迎えに」

「意識の無いあいつの凍結を解けば、あれは人の形を保てない。だから忘れる」

「それでも私は行きます」

「凍ったまま目覚めさせることもできない。身体が碎ければ世界が沈む。救えない現実を突き付けられるだけで何も得られない」

『それでも』行くんです。……約束だから」

乃木園子が自己犠牲的な慈愛の表情を浮かべる。

絶望が約束されたそんな顔、私は見たくなかった…… 待て……これは私の感情か？

愛してるだのなんだのと、あいつのものじゃないか？ 分からなくなる……

「……ならすべての希望を置いていけ」

「やっぱり、あなたは一緒に来てくれないの……？」

「私もあいつと同じく、崩御すれば世界が燃え尽きる。共には往けない」

「そっか……そうだったんだ……」

ずっと一緒にいてくれてありがとう……さようなら、楓さん……」

「さようなら、乃木園子」——

これで全員送り終えた。

厳密には「これで全員を殺し終えた」だが……

人間があんなコミカルに死ねるわけがない。

黄泉の遣いとしての私なら安楽殺くらいはできる。

……これで良かったのだろうか。***

もう私も、どこぞへ消えよう。